平成 16 年 1 月 27 日

平和か戦争か？　自然か産業か？

堀尾哲一郎

（社）日本環境フォーラムなどが主催する市民のための環境公開講座でレイチェル・カーソン日本協会理事長の上遠恵子氏の「レイチェル・カーソンに学ぶ」と題する講演を拝聴した。レイチェル・カーソンはアメリカの海洋生物学者で作家です。1962 年出版された「沈黙の春」が我々の環境を考える原点となっています。講演では、この「沈黙の春」が出版されるまでの困難な過程を「100 人の 20 世紀」と言う映画の抜粋で紹介された。当時、ＤＤＴに代表される殺虫剤がいかに自然界を破壊しているかの事実を多くの学術データに基づいて、世間に知らしめようとしたが、産業界の反発を恐れる出版社からからはことごとく断れ、殺虫剤の製造会社からは反論が出され、なかなか出版にこぎつけられなかった。この流れを変えたのは、Ｊ．Ｆ．ケネディ大統領であった。彼はレイチェル・カーソンの警鐘に目を留め、調査委員会を設置し、殺虫剤の効果のみならず、その安全性について詳しく調査させ、その危険性を確認した。その結果、出版社も出版に応じ、後に、アメリカを変えた 25 冊の本に選ばれた「沈黙の春」が誕生したのである。ケネディ大統領なくして「沈黙の春」の出版はなかったのである。自然を過去から未来へつなぐ遺伝子の安全を確保することと産業の発展との調和を何処に求めるかは現在においても人類に問われている課題である。タバコと癌の問題、化学物質の安全性の問題、核物質の安全性の問題など枚挙に暇がない。自然か産業か？二社択一ではなくどのように調和させるかが我々に課された命題である。21 世紀は環境の世紀とよく言われますが大きな戦争が始まってしまいました。云うまでもなく、戦争は最大の自然破壊です。わが国も歴史的な大きな転換点に立っています。この講演を拝聴して、今こそ、子孫の立場で国民一人一人が平和か戦争か？を考えるときと思いました。